

第1分科会：公共図書館の経営と課題

司会者：柳沢正喜（村立朝日村図書館）

発表者：井上喜久美（下諏訪町立図書館）

丸山真由美（村立朝日村図書館）

○ 下諏訪町立図書館の発表 「除籍と保存」

1 発表の概要

- ・多くの図書館では、厳しい予算の中で図書の受け入れ冊数が減ってきているが、除籍の冊数は横ばいか上昇傾向にある。これは、閉架の書架に余裕が無くなってきていることによるものではないか。
- ・このような現状では、除籍を行うことが必要となってくるが、他館での所蔵確認や将来的な価値を判断し、的確に行っていくことが大切ではないか。
- ・除籍の判断は、利用実態より資料価値に重きを置いて判断している館が多い。
- ・除籍基準を設けて、資料の取り扱いに対する説明責任を果たすことが必要となる。

2 まとめ

- ・資料保存を大切にしたい。（有効に保存するために、不要資料を整理するという意義）
- ・除籍は第2の選書である。（経験豊富な司書が担当してほしい。）
- ・資料を持っている価値を見出すために、所蔵確認をしてほしい。県単位くらいで、保存タイトル数を増やしていくという意識も必要ではないか。
地域のネットワークでの資料保存協力体制が整備されることが望ましい。
県立図書館を核とした資料保存ネットワークができることが望ましい。
- ・資料が将来必要とされるかどうか判断する際、市民の資料要求をライフサイクルでとらえることはできないか。
例：高齢者の方が、若い時に読んでいた本を求める・・・要求に答えることができるか。
- ・除籍のネットワークでは、公立高校も含めて学校とも連携をしていくことが必要ではないか。

3 除籍の実例

実際に何冊かの本を実例として提示し、除籍の可否について意見交換を行った。

○ 村立朝日村図書館の発表 「ちっちゃな村のホットな取り組み」

1 発表の概要

- ・朝日村図書館の運営状況を紹介。
信州朗読駅伝「森林（もり）物語」、大人のための朗読のタベ、コーヒータイム&ハーブ演奏、朝日村文化祭での本のリサイクル など
- ・子どもたちの喜ぶイベントなどを工夫している。
本の木、読書推進イベント「チーム対抗 日本ぶらり旅」、ハロウィン関連イベント、木地玩具コーナー、出張ドコでも本ばこ など

2 まとめ

- ・読書推進イベントでは、初めてチーム対抗の形をとり、チーム紹介なども行って楽しい取り組みとなっている。子どもたちの読書活動に結びついていけば良い。
- ・近くに小学校や保育園があり、子どもたちや親子連れの利用が多いので、図書館を楽しく利用できるような工夫をしている。また、保育園へは本に興味をもってもらえるように、出張ドコでも本ばこという読み聞かせに出かけている。子どもたちが本に興味を持つきっかけとなれば良い。
- ・図書館のイベントは、いろいろと地元の皆さんが協力してくれる。図書館を利用している皆さんの交流の場になれば良い。

○その他 分科会参加者で情報交換を行った。

第2分科会 地域住民のニーズと公共図書館サービス

- ① エコールと学校図書館の連携
- ② 学校図書館と公共図書館の連携について

司会者 柄沢幸子(千曲市立戸倉図書館)

発表者 ①酒井詩織(上田市立図書館) ②宮崎摩紀(千曲市立戸倉図書館)

1 発表の概要

- ① エコールは上田・東御・小県地域 12ヶ所の公共図書館(室)ネットワークで、小・中学校図書館とネットワーク化し、児童・生徒の調べ学習の推進と読書活動の普及に努めている。「学校回送」は学校から公共図書館へ本の取り寄せ・返却ができ、回送車で毎週1回配本・回収する。エコール内約85万冊の蔵書が利用でき、電話等によるレファレンスや資料検索にも対応。「団体貸出」は団体が冊数制限なく1か月間利用できる。「本はともだち」事業は、年6回講師が学校を訪問してブックトークをし、物語6冊、詩の本1冊をセットにして紹介する。聞く読書と読む読書のつながりにより「いろんなジャンルの本を手にするようになり、少し長いお話にもチャレンジする子どもがふえた。集中力が増して『聞く力』もついている」などの教師からの声が多い。今後、情報交換の機会の増加、司書教諭以外の教師や学校全体との連携、「本はともだち」事業参加校の増加、各図書館の長期的な職員の配置などが望まれる。
- ② 「ブックネットちくま」は13の小中学校と5つの公共図書館が協力し、全体で40万冊の蔵書を一括管理する仕組み。「書名リクエスト」と「テーマリクエスト」があり、学校司書に依頼する。「テーマリクエスト」は「〇〇が載っている本」など、レファレンス的な取り寄せができ、クラスの人数分の図書が必要なときは全館から協力を得られ、授業の充実に役立っている。物流ネットワーク(図書の輸送)は各図書館を1日2回配送しており、「書名リクエスト」は2週間、「テーマリクエスト」は1か月利用できる。移動図書館は、遠隔地の小学校や児童館を定期訪問し、読み聞かせや貸し出しを行っている。また中学校の校内に公共図書館の分館が設けられており、地域と学校の交流も行われ、土日祝日は中学校図書館が市民の学習室として解放されている。学校と公立図書館の司書は年1回会議を持ち、意見交換に努めている。

今後の課題としては、司書や教員の異動時の引き継ぎや質の高い蔵書構築の必要などがある。

2 討議の概要

- ① 柳沢(立科町) インターネットでの調べが増え学校回送の本の利用が減っていることはないか?

A 公共図書館への問い合わせはある。利用減少は学校図書館が充実してきたことも考えられる。

(地域住民のニーズと公共図書館サービスについて)

奈良澤(安曇野市) システムの連携はない。今年から市内配送車を導入、学校と団体を回る。

竹内(小諸市) オンライン化していきたい。学校と公共図書館がスムーズになるように。

大月(松本市) オンライン構築なく団体貸出。テーマごととブックセットにし箱ごとの貸し出し。

井澤(東御市) クラス貸出30冊まで3か月。学校図書館の支援を計画、司書教諭を含め会議。

小林(松川村) リクエスト本は館長と相談して対応。利用者の興味を引くのに難しさを感じる。

西山(長野市) 開館30周年、県の協会と共催で読書駅伝、記念講演会、コンサート実施。

荻原(飯山市) 学校司書と隔月司書会でレベル向上に取り組む。学校利用をどう増やすか課題。

塩澤(駒ヶ根市) 学校と公共図書館の司書が同じ採用。幼保に毎月巡回。先生方の協力を希望。

平出（箕輪町）商工会、企業と箕輪町キャリアデザインコーナーを作り新しい窓口とした。

郷土史のアーカイブス化をして学校でも使用。障害者の方が利用し易いように電子化。

大塚(安曇野市)家庭で不要の本で図書館にない本を入れた。家庭もにっこり図書館もにっこり。

工藤(宮田村)図書館祭りのリサイクル本を村民が楽しみに。利用者高齢化。小中学生来館減少。

3 まとめ

学校図書館と公共図書館が連携して効果を上げている。学校司書と図書館司書の立場の違いがあるので会議が有効。アーカイブス化など地域サービスを先進図書館に学んで進めたい。

第3分科会 公共図書館のバリアフリーサービス

司会者 篠原秀郷氏 (佐久市立中央図書館)

発表者 篠原八重子氏 (長野市立長野図書館)

発表者 今村洋子氏 (飯田市立中央図書館)

発表の概要

1 長野図書館の障がい者サービス

- (1) 障がい者サービスの開始は平成7年度から開始。すべての人に図書館利用の理念から
- (2) サービスの対象者は視覚に障害があり墨字が読みにくい者(対象地域は北信地域)
- (3) 点訳・音訳者は「図書館協力者」として点訳者の養成講座は2週間に1回の割合で半年、音訳者は週1回の割合で半年間実施した。なお、無料のボランティアと区別しており謝金の支払いをしている。
- (4) サービスの内容は
 - ア 来館者 対面朗読で1日2時間単位、最長6時間まで週に3回(水、木、金)
 - イ 来館できない者
 - (ア) 点字、録音図書の自館制作及び郵送による貸し出し、サピエ図書館からの相互貸借、CD・カセットテープの貸し出し
 - (イ) レファレンス 語句の意味等の問い合わせ
- (5) サービスを広げるためのPR活動
 - ア 声のお知らせCD及びカセットテープ「声の魯桃桜」の制作・送付や点字・録音による新着目録の制作・送付
- (6) 図書館の環境 大活字本 拡大読書機、対面朗読室、録音室6室、点字ブロック他
- (7) 職員体制は4人で業務は読みの調査、例会の開催、勉強会の開催 選書、ボランティアの養成
- (8) 今後の課題は障がい者以外のサービスについて検討していきたい。

2 誰もが利用できる図書館を目指して飯田市立中央図書館

(1) 図書館利用が困難な者へのサービス

ア 障がい者サービス

(ア) 点字図書の提供

(イ) 対面朗読

(ウ) 録音図書の提供 昭和58年「声の本」の貸し出し開始

a 録音図書の作成

(a) 選書(リクエストなど)、郷土雑誌、新聞のコラム

(b) ボランティア団体「声の輪」の養成及び例会、情報誌、利用者との交流会。

イ 高齢者サービス 大活字本 宅配サービスの検討

ウ 多文化サービス 外国語の資料の貸し出し(蔵書数26年度末3814冊)

エ 図書館の環境 カウンターの高さの検討、車いす、エレベータの設置、プレクストークの貸し出し、拡大器、「筆談」の表示

オ PR活動 福祉関連施設へのパンフレット配布

3 質疑及びまとめ 障がい者などのサービスの充実を考えていかなければならない時期に来ている。謝金は予算の範囲内で年度ごとに替わる。対面朗読は回数で、点訳は枚数。ボランティアについて、経費等は考えてほしい要望がある。利用者は高齢化が進んで利用者が減ってきているが著作権法の改定で対象者は広範囲になりつつある。福祉関係の部署と連携が必要。

対面朗読は現在全盲の3人が対象となっているがPRして増やすのが難しい。点訳者の養成は時間がかかるが時間をかけて要請していかなければならない。録音図書はテープからCDへ。

第4分科会 司書教諭の仕事と役割

助言者 和田敦

発表者 関島 真知子 (豊丘村立豊丘中学校) 関 陽子 (塩尻市立塩尻西部中学校)
花岡 直美 (佐久市立野沢中学校) 中島 寛子 (岡谷市立田中小学校)
平中 和司 (南木曾町立南木曾中学校) 岡田 真美子 (須坂市立仁礼小学校)
山崎 久子 (長野市立北部中学校)

1 発表の概要

司書教諭委員会の皆さんによるレポート発表の後、ビブリオバトルのワークショップを体験。

(1) 司書教諭委員会の皆さんによるレポート発表

①「司書教諭の仕事と役割～読書の幅を広げるための指導はどうあったら良いか～」(関島 真知子先生)

全校ブックトークの実施

村から児童生徒へ『誕生日図書贈呈』がある。その本の選定は松本市の書店「ちいさいおうち」の越高さんが行っている。選定の際の越高さんの思いを、全校に向けてブックトークをしていただき、生徒達は感想を寄せた。今年度も実施し、今回は誕生日図書ではなく、『本を読む楽しさ』をテーマに行った。

一押しブック紹介カード作成と掲示・IOB(一押しブック)総選挙の実施

生徒が学校図書館に入れる本を選び、その本の魅力を伝え合う活動を行った。越高さんに100冊本を選んでいただき、その中から学校に入れる本を選ぶ。本を選ぶ際に気をつけていることを司書の先生から話してもらったり、選定に迷っている生徒へのアドバイスをしてもらったりもした。生徒が書いた『一押しブック紹介カード』を貼り出し、司書の先生が語り、IOB総選挙の投票を行い、上位10名を校内放送で発表した。また、紹介された本はすべて購入し、貸し出しの際、『いいね!』カードを渡し、読後の感想を書き、『図書館便り』に載せてもらった。さらに、紹介カードを継続し、改良を重ねている。

②「司書教諭の役割」(関 陽子先生)

日常の連携

調べ学習の基本となる『ポプラディア』の使い方について、司書の先生から指導。調べ学習は、各教科で必要となるため、教科担任と司書の先生で連携を取り、実施している。

委員会活動でも連携。

特別な場合の連携

読書旬間の内容によって、お話給食では栄養士の先生と、図書委員による企画では情報の係の先生や市立図書館の方々や全職員と、本の紹介では新任の先生方と連携を取っている。

(2) ワークショップ

図書教諭委員会の皆さんが見せてくださったビブリオバトルを参考に、5人一組となり、体験した。3分で自分が選んだ本を紹介し、ディスカッションを2分行い、15秒で次の準備をするという流れで行い、最後に『チャンプ本』を1冊選んだ。実施する中で、語り手は一生懸命に語り、聞き手は真剣に聞いていた。どの本も「読んでみたい」と思う語りだった。

2 まとめ(助言者のご指導)

- ・図書館は学習センターとしての役割を求められている。司書の先生と授業を作り、継続している関島先生の取り組み、全教科・領域で図書館を活用し、委員会活動も全職員で共有している関先生の取り組み。共に、どの学校でも取り入れていきたい。
- ・ビブリオバトルでは、小グループでの活動により、和やかになり、本を通してコミュニケーションが取れる良い活動。

第5分科会 司書の立場からの授業支援

助言者

清水正彦先生 (飯綱町立飯綱中学校校長)

司会者

黒岩やす子先生 (中野市立豊田中学校)

発表者

清水早苗先生 (松本市立明善小学校)

米山篤美先生 (駒ヶ根市立赤穂南小学校)

杉本幸恵先生 (安曇野市立豊科南中学校)

武田道子先生 (上田市立丸子北中学校)

1 発表の概要

①「ビブリオバトルの実践レポート」 清水先生

週1回の図書館の時間を使い、5・6年生に対して企画したビブリオバトルの実践方法等を紹介。

②「ブックトークによる授業支援」 杉本先生

朝読書の時間を利用したブックトークの実践について。授業支援に関わり、授業時間を利用したブックトーク実践について。

③「学びが広がるブックトーク」 米山先生

図書館の時間を利用した、各教科の授業支援としてのブックトーク実践。ブックトークのテーマ紹介。

④「実践レポート・詩の復元にチャレンジ」 武田先生

毎年、地域の方を講師に招いての丸子コスモス大学を開設。今年度は歴史体験学科の活動として、図書館を使った調べ学習の実践指導をしていただいた。その中で行った「アニメーション」の実践。

2 討論の概要

6人ずつのグループに別れての討論。それぞれの図書館図書室等の現状発表や困っていることを出し合い、話し合った。授業支援に関わらず、広い範囲での話し合いテーマが出された。

3 まとめ(助言者の指導)

今回の発表では、実践に向けてのヒントをたくさん得られたと同時に、学校という場においての司書の存在感の大きさを感じられた。

効果的な授業支援をするにあたって大切なことは、学級担任や教科担任の先生との双方向の打ち合わせ、子どもたちの実態を知ること、そして本を知ろうと努力し続ける事。今後の課題として、児童生徒の情報活用能力を育成していくことがあげられる。

また、司書という一人の職場では孤立しがちなので、外とつながる研修の機会を大切にしてほしい。授業支援という点からも、司書の専門性への期待が高まっている。

第6分科会 「図書館運営のあり方」

助言者 村田忠久（東信教育事務所指導主事）

司会者 畑陽子（上田市立依田窪南部中学校）

発表者 上條ひとみ（松本市立鎌田小学校）

花房瑞枝（小布施町立小布施中学校）

1 発表の概要

上條ひとみ先生 テーマ「魅力的な使える学校図書館を目指して司書のできることはなにか」

・鎌田小学校図書館の実践発表（スライドを通して）

選書・廃棄（代替えの本を用意して廃棄する。古いものを新しい本に買い換える。）・展示（毎週25冊の新刊本を紹介コーナー、月ごとのテーマブックコーナー、国語との関連本コーナー、出来事コーナー、委員会のおすすめ本コーナー等）・紹介（読み聞かせ、図書館便りなど）・環境（緑色を基調）・オリエンテーションの充実、レファレンス、分類（被伝者ごとの伝記の分類、自然科学3桁分類等の工夫）

花房瑞枝先生 テーマ「図書館運営のあり方」

・司書教諭の立場から見た学校図書館の課題は、「学習センター」「情報センター」としての役割が十分でないところである。問題は、「図書館とパソコン室が離れている」「パソコンの方が調べるのに手軽で早い」「司書が常勤でなく図書館が常時開館していない」「司書教諭に図書館に関わる時間がない」等である。

・開放的で落ち着ける環境を町図書館に学びたい。

・図書館を生徒の居場所、癒しの場としたい。

2 討議（6グループに分かれてのグループ討議）

・司書の勤務形態の悩み（雇用が地域により様々）。

・司書と司書教諭、担任や子どもとの連携をどうとっていったらよいか。図書館の利用は担任の意向で決まるところが大きいので、担任と連携をとる必要がある。司書からは声を掛けづらいので先生方から話し掛けて欲しい。子どもとは読み聞かせを通して子どもに寄り添う。

・子どもが本を好きになるためには低学年の「コナン」、高学年の「ワンピース」や漫画系、中学生の映像化されたもの等も、文字を好きになり本に親しみのめり込むようになるために推奨すべきである。

・情報センターとしての図書館のあり方をもっと意識した図書館運営をしたい。地域によっては、公的図書館と本の貸し出しネットワークシステムがある。

・本の廃棄は、司書部会で全員で助言しあって決めている。

・書架は高価であるが、地元の材木屋さんに作ってもらおうと安価である。

・画面が正しいと思い込んでいる子どもにどう本を投げかけていくか。調べ学習に本の方がコンピュータより有効に活用できるという確かなポイントを司書が持って薦めたい。

・最近図書館が要配慮生のクールダウンの場となっている。どのようにそういう子を支援していったらよいか。図書館はこういう役割も担うようになってきている。

・代本板の利用はプライバシーの面から使用しないところが増えてきている。

3 まとめ（助言者の指導）

・全国学力調査の結果等から全く読書をしない子が小6で19.2%中3で34%いる。他の調査でも「課題解決に向けて主体的に文章が読み取れない」「登場人物の相互の関係が読み取れない」という実態がある。読書活動と国語の授業との関連を図り、関連する本との並行読書をさせ様々な本に触れさせる等多様な読書体験を通し思考力判断力を向上させることが大切。公立図書館との連携。

・図書館の3つの機能「読書センター」「学習センター」「情報センター」

・図書館活用のために実態把握をする。こんな状況に甘んじていないか。（・同じ子しか来ない・授業で使うことがない・扉に鍵・書架に本がない・データベースが進んでいない）

第7分科会 読書指導のあり方（学習センターとしてのあり方）

助言者 宮島 卓朗（北信教育事務所）

司会者 牧野 優子（高陵中学校）

発表者 羽生 仁美 宮澤 清香 池田 由紀 岸本 瀬里亜（欠席）（永明小学校）

頓所 本一（木島平中学校）

1 発表の概要

〈永明小学校 研究テーマ：学校図書館を活用しながら、自分の課題を研究し、考え、交流する子どもを目指して〉

- ①「図書館教育」のあり方と成果、課題を発表。教科学習でどのように活用できるかに焦点を当て、実際の授業の様子を授業記録や学習記録からまとめる。
- ②生活科（岸本 瀬里亜先生）、社会科（宮澤 清香先生）、国語科（羽生 仁美先生）で、図書館を活用した「教科学習」の可能な単元を計画し、「授業でつける力」を明確にした学習指導案に沿った授業展開の提案。
- ③読書教育活動、情報活用力の育成、言語活動（考える力）を身につけるための図書館を活用した「教科学習」の構造化を図ることの重要性。

〈頓所 本一先生 研究テーマ：読書指導のあり方（学習センターとしてのあり方）〉

- ①子どもたちが図書館に足を向ける意味は、自分づくりの「哲学」的要素、世界づくりの「探求」的要素、仲間づくりの「平等」的要素の3つに分類されるという視点からの分析。
- ②子どもたちにとって魅力ある図書館にするためには、事典や辞書類などの「原点となる書物」、資料やデータなどの「多様性のある書物」、高校生が使っている教科書レベルの「質の高い書物」を選書する必要がある。

2 討議の概要（1～8に分かれてのグループ討議）

- 1.読書指導の実践（読みきかせ、ブックトーク）、選書方法（リクエスト本の採用基準）、調べ学習での図書館利用について。
- 2.保護者や地域のボランティアを使った読みきかせ、利用者にとって魅力ある配架、企画、特典の工夫、読書旬間の活動内容、図書館の予算について。
- 3.図書館の利用促進につなげる工夫（図書館だより、読書旬間の企画、読みきかせ）、情報センターとしての図書館の課題について。
- 4.調べ学習における教科担任と司書の連携・資料調達の現状、学校全体で取り組む図書館教育の必要性について。
- 5.朝読書の現状、学習センターとしての図書館利用の状況と課題、選書と利用者を結びつけることの難しさについて。
- 6.地域間での本の相互貸借、家庭読書やボランティアによる読みきかせなど地域全体での取り組みの重要性について。
- 7.図書費用の予算やシステム導入の有無、司書と授業（教科学習）の関わり方、教科学習と図書館利用における連携の難しさについて。
- 8.永明小学校と木島平中学校のレポート内容、選書基準（ライトノベル、性描写など）の難しさ、地域間で差が出ないような図書館作りについて。

3 まとめ（助言者の指導を含む）

- ・永明小学校のレポートは、課題設定「子どもたちにどんな力をつけさせたいのか」を明確にして図書館を使った授業を行い、授業後も身につけた力が生かせる取り組みがなされていた。
- ・頓所先生のレポートは、どのように教科学習と図書館を意図的に位置づけていくのかを投げかけるものであった。主体的な授業をするために図書館を大切にしていきたいという思いが伝わってきた。子どもと共に学ぶ教師は図書館を大切にできる。

助言者 春日 直史（教育センター専門主事）

司会者 武居 早苗（木曾町立日義中学校）

発表者 北澤 沙弥香（千曲市立治田小学校） 田中 喜美江（伊那市立伊那中学校）

1 発表の概要

<治田小学校>

- ① 図書館の環境・・・配置をわかりやすく。読んで欲しい本を手に取りやすく。
- ② 読書交流・・・他学年と読み聞かせ（読書旬間など）。キャリア教育の一環として。
- ③ 図書館を生かした授業作り・・・3学年「図書館たんていだん」など。
(パワーポイントの資料を見ながら、4つの事例の報告)
- ④ 司書の先生として行うこと
 - ・図鑑は貸し出ししないが、支援の要する児童には配慮（担任と相談して）
 - ・2冊貸し出し。1冊はお話の本、もう1冊は図鑑など。
 - ・「みどり号」（巡回貸し出し）と学校の間を取りもつ。

<伊那中学校>

- ① 学校図書館は学校生活全てにつながる。
 - ・授業や給食、生徒会とコラボ。
- ② 学校図書館として、学校図書館司書として。
 - ・司書は、生徒や先生から情報を得るようにする。担任の先生には司書の先生からアプローチ。
 - ・図書館以外にも、本を展示するコーナーを設ける。→いつでも本が目に入る
 - ・特別支援学級、院内学級との関わり。年に数回院内学級を訪問して読み聞かせ。
 - ・教科書にあらかじめ目を通し、担任の先生と相談して、必要だと思われる資料を用意する。
 - ・人と人、各教科と各教科をつなげる。
- ③ 伊那市内では、学校間でメールによるネットワークがあり、学校間で本の貸し借りをしている。

2 討議の概要

6つのグループに分かれ、レポート発表の感想や各校の取り組みや課題について話し合った。

- ・行政での呼び方「学校司書」にしてもらいたい。
- ・学校司書は、授業に関わっていくことが大切。
- ・司書として、担任の先生とは違う視点で情報提供をしている。
- ・前年度に足りなかった資料を次の年に購入している。調べ学習で使う資料が多くなった。
- ・学級通信などを見て、情報を集めている。
- ・調べ学習について、人数分の本は市立図書館との相互貸借で対応しているが、他の学校とも時期が重なるので難しいことも。
- ・担任の立場として、司書から「～を調べられる」の提案をしてほしい。
- ・担任の先生が本を読むクラスは、子どもも読む。
- ・クラスによって授業の進め方が違ったり、突然来られたりすると対応に困る。
- ・図書館利用、担任によってやめてしまうこともある。時間割の変更をきちんとして、図書館から遠のかないようにしている。（逆に突然来て他クラスと重なってしまうこともある）
- ・小中連携、図書館内だけでも連携を深めたい。
- ・雇用の形態について。学校ごとの労働条件が異なることでの問題がいろいろある。
- ・異動によって、他校の図書館の実態を知ることはいいこと。

3 まとめ（助言者のご指導より）

調べ学習（探求型学習）で大切なのは、課題を決めだし、情報を収集することである。情報収集の際に、図書館は何ができるのか。例えばポプラディアなどを用意して、司書が使い方を教えるといった支援ができるであろう。そのためには図書館司書もいろいろな下準備をすることも必要になってくる。

これまでも図書館司書は様々な場面で活躍をされてきたが、今後は、担任の先生と協力をしながら、さらなる活躍を期待したい。

第9分科会 ティームティーチングの実践の試み（音楽/英語）

司会者 長良聖子（飯山北高等学校）

1 発表の概要

① 図書館を利用して

渡邊亜希子（明科高等学校・音楽）・酒寄美佳（明科高等学校司書）

「歌舞伎」をテーマにし、音楽だけでなく幅広い知識を自ら学ぶことを目的にグループワークを試みた。「図書館の机のほうが大きくてまとめやすい！」という生徒の声で司書へ相談して見る事に……。歌舞伎の知識のみならず資料収集から始まり、情報収集の方法・まとめ方のレイアウトなど司書のバックアップで完璧な TT 体制の授業となった。あまり勉強に興味が無い生徒達も自発的な学びへと変化し、自主的に放課後に残って作業する生徒も現れた。プレゼンに関しては、裏付けがしっかりとした調べ学習ができていたため突然の質問にも対応できており、自信を持って発表する姿が見られた。

授業で利用しない理由は、「何をしてもらえないかわからない」ということが一因。司書はもっと積極的にプランの提示や声かけを行ってもよい。日常的な会話を通して、気軽に声をかけてもらえるような存在になることで、授業利用しやすい雰囲気を作ることができる。全教科で作成している「明科高校授業への取り組み白書」に掲載したことで、他教科へ評判が広がり利用の機会が増えた。

② 授業「プレゼンテーション」と図書館の連携

轟律夫（軽井沢高等学校・英語）・青木紗也香（軽井沢高等学校司書）

3 学年グローバルスタディーコースの生徒を対象にプレゼンテーションの授業を行っている。TT は複数の視点で生徒の実態に即すことができ、教諭と司書の各々の専門性や特性を活かせることがメリット。

TT を行うための秘訣は、とにかく打ち合わせを綿密にする事。どの場面でもどちらが授業をリードするのか、次回授業の進め方など積極的に打ち合わせをすることでより良いものになる。

特に個人プレゼンとして、ある国または地域の観光大使に成りきる「観光大使プレゼン」を行った際は、リサーチに必要な資料の収集・参考文献の書き方指導といった司書の協力が大きかった。その他、プレゼンに関する本のブックトークや評価にも関わるなど授業に貢献している。

軽井沢高校図書館では、とにかく先生方の要望には全て応えるよう心がけ、自信はなくてもやってみる！という姿勢で授業での図書館利用を促している。



第 10 分科会 大学・短大図書館の広報手段あれこれ

共同発表・司会 津田ひろ子（信州大学附属図書館工学部図書館）

小池美津貴（飯田女子短期大学図書館）

① 「お役立ち文例集」の作成

図書館内に掲示する、案内・告知・注意喚起などの文例を、参加館で共有し、質の向上と労力の軽減とを同時に図ろうという試み。今大会前にあらかじめ募集を行い、共有可として提供されたファイルについて、発表館のほうで取りまとめ作業を行って、Google サイトを通じて全参加館からアクセス可能とした。参加館は、そのサイトから使いたいファイルを自由にダウンロードすることに加えて、新たにファイルをアップロードしたり、カテゴリーを追加したりすることも可能である。アップロードされたファイルは、他の館が利用・改変することを承諾したものとみなす。

② 「謎解きゲーム」問題の作成

学生が楽しんで参加して、図書館の使い方を身につけてもらえるような、「謎解きゲーム」の問題を、ワークショップ形式で作成する。

参加者からは事前に、問題のテーマにしたい、どの館にも共通するような題材を募集しておき、集まった題材を、大きく 5 つの下記のようなカテゴリーに分けておいた。

1. 情報検索（論文・記事検索、ウェブ検索との違い、オープンアクセスなど）
2. 図書館の使いこなし（複写、レファレンス、予約など）
3. 館のルール・マナー（飲食、通話、書き込みなど）
4. 図書の利用（貸出冊数・日数、延滞罰則、禁帯出など）
5. 図書検索（OPAC、分類番号、書架配置など）

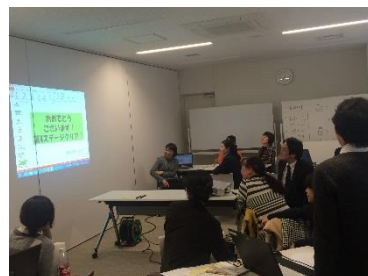
当日の参加者をくじ引きによって各カテゴリーに割り振り、それぞれに関する問題をグループで作成した。作業の結果、以下のような問題が完成し、その場で発表を行った。

1. 情報検索に関するクロスワードパズル
2. 図書館利用に関する〇×クイズ
3. 館のルールが浮かび上がる暗号解読
4. 貸出ルールに関するクイズ
5. 分類番号と主題の組み合わせ

作成した問題は、上記「お役立ち文例集」と同じシステムを通じて共有し、各参加館において、実際にこの問題を使ったイベントを開催する。イベントの開催期間は 12 月 7 日（月）～18 日（金）とし、正解者への表彰・賞品などは各館の工夫に任せる。



グループでの問題作成の様子



作成した問題の発表

第11分科会 絵本から広がる子どもの世界

司会者 尾芦 富枝 (小諸市立中央保育園)

発表者 柳澤 薫 (小諸市立芦原保育園)

I 発表の概要

配布資料に基づき実践事例発表

1 芦原保育園の絵本の取り組みについて

- ① 毎朝の絵本の読み聞かせ ② 保護者向けの絵本の講演会 ③ 絵本の家庭への貸し出し
 - ④ 小諸市立図書館へ、絵本を借りに行く ⑤ 希望者に月刊絵本の斡旋 ⑥ 絵本の職員研修
- ### 2 絵本「まゆとかっぱ」から広がるごっこ遊び

- ・年長組は、昨年度から「やまんばのむすめ まゆ」シリーズを読み親しんでいた。4月、絵本「まゆとかっぱ」を読むと、子ども達からごっこ遊びが始まっていった。主人公まゆと同じ腰ひもを巻いて遊ぶ年長組。年中・年少・未満児組の子ども達も巻き込んで、かっぱを見つけに行く散歩・レストランごっこ・おみこし作り・運動会・ホットケーキ作りの調理体験などの、様々な活動を絵本の世界をイメージして園全体で楽しむことができた。
- ・絵本の絵は動かないが、絵本で子ども達の心が動く。今後も、すてきな絵本に出会えるよう絵本を見る目を培っていきたい。子ども達が初めて出会う本は、一生の宝物になるかもしれない。

II 討議の概要

5グループに分かれて、3つの柱について話し合い発表

① 各団体・保育園などでの絵本の取り組みについての情報交換

- ・どの園・小学校でも、園長・保育士、保護者が朝や帰りの時間等に読み聞かせをしている。ボランティアや図書館でも定期的に取り組み、ボランティアは年齢層が広く若い母親達が読み手として参加している。
- ・絵本の勉強会を持ち、年齢にあった絵本を選択できるようにしたり、読む前に何度も練習をしたりして努力している。
- ・小学校高学年になると、読み聞かせの本の選定が難しい。
- ・読み聞かせは続けることが大事で、年齢が小さくても集中して見ていて遊びにも繋がる。大人になっても、誰かに読んでもらうことは嬉しい。

② 保護者への意識づけ・どう働きかけたらよいか

- ・毎日帰園時に、一日に子ども達が読んだ絵本を箱の中に入れて置いておき、保護者に関心を持ってもらったり、親子の会話のきっかけ作りをしている。
- ・園便りに保育士の推薦絵本を載せたり、小学校では読書週間で親子読書をしたりする。
- ・月刊絵本はいろいろな本が手に入るのでも利用してもらいたいが、購入が難しい状況もあり絵本のよさを伝えていくことが大事であると思う。
- ・参観日の懇談会で絵本について話題にし、読み聞かせを習慣にしてもらうよう呼びかけたり、絵本の貸し出しをしたり、毎月〇日をノーテレビ・ノーゲームなど親子で本を読む機会を作っている。

③ 図書館利用の取り組みについて

- ・園から図書館へ行くきっかけ作りとして、散歩時に利用したりお話会に参加している。
- ・図書館も利用してもらうような、取組みが必要ではないかを感じる。若い母親達によるお話会などで、参加者の輪が広がっていくなどの環境作りが大切だと思う。

III まとめ

今、携帯・ユーチューブなどを子どもに与える保護者や、絵本を読んでいる保護者の二極化の傾向が見られるように思う。本日の情報交換から、地域・各団体・小学校・保育園で、子どもや保護者に絵本の素晴らしさを伝えていく必要性や大切さを感じた。絵本から広がる素敵な子どもの世界を、作り出すきっかけになることを願っている。

第 12 分科会 ビブリオバトル

助言者 小林 いせ子 (読書アドバイザー)
司会者 相馬 留美 (佐久市 PTA 親子文庫)

① 発表の概要

ビブリオバトル(知的書評合戦)について

- ・最近読み聞かせだけではなく、ビブリオバトルという新たな取り組みが出てきている。本を通してのコミュニケーションツールとして活用の方も広がっている。
- ・ビブリオバトルは「人を通して本を知る、本を通して人を知る」が掲げられている。5分間で本の魅力を読んでもいない人にどのように伝えるか。「この本を読んでもらいたい」という自分の本心からの感想をみんなに伝える。

5分間を	1分(導入)	3分(内容)	1分(まとめ)に分ける
	興味を持ってもらう	伝えたいことをまとめる	まとめ
	・本のタイトルや本とのかかわりについて	・内容についての伝えたいことをまとめる。	どんなところがよかったのか等
	・みなさん「こんなこと」を知っていますか? など簡単な疑問を投げかけてみるのもいい	・簡条書きで一度内容を出す	

- ・バトルなので聞き手の評価が重要になってくる。(聞き手の“読みたい”つなげられるか)これによりバトルにはスピード感やゲーム感覚がある。

ビブリオバトルの意義

聞く人に“読んでみたい”と思ってもらいたいと生の気持ちを伝える。
聞き手も紹介者の生の感想を聞くことができる。刺激がありよく聞く。
質問の時間も大切→聞きたいことがすぐに聞ける。

ワークショップ方式

- ・4つの班に分かれてビブリオトークを行う。
＜ビブリオトーク＞一人ずつ本を紹介していく。
まず5分程度で本の紹介→その後2分程度で意見や感想を話し合う→次の方の発表
- ・各班で1名(1冊)推薦し、4人の代表者でビブリオバトルを行う。

② 討議の概要

- ・4つの班に分かれて一人1冊ずつ持ってきていただいた本でまずはビブリオトーク。
助言者に各テーブルを見て回っていただき助言をいただいた。
- ・それぞれの班ごとに聞く、質問するが良くできていた。
- ・各班から1冊ずつ推薦された代表者4人でビブリオバトルを行う。

題名 / 著者名 / 出版社

- | | | | | |
|--------------------|---|-----------------|---|--------|
| 1 : 黒冷水 | / | 羽田圭介 | / | 河出書房新社 |
| 2 : 食卓一期一会 | / | 長田弘 | / | 晶文社 |
| 3 : 皇帝フリードリッヒ二世の生涯 | / | 塩野七生 | / | 新潮社 |
| 4 : いのちをいただく | / | 原案,坂本義喜 作,内田美智子 | / | 講談社 |

今回は2 : 食卓一期一会がチャンプ本になりました

③ 助言者の指導・まとめ

- ・中学生の読書活動について (中学生向けの選本)

中学生は自分で自分を育てていく時期に入るが、自分を成長させるには親や大人の協力が必要。
中学生はやるが増え忙しくなってくるので先生の力を借りてブックトークやビブリオバトルをやってもらったり、家では本の情報を取り入れ「この本が今話題」「こんな本があるよ」と後押しをして本との出会い、読むチャンスを作ってあげられるようにするといい。

自分だったら、自分なら、など考えさせてあげられるような本を選んでみると良い。

- ・1冊ずつ持ってきてもらいそこから皆さんの心をつないでいくのはとても重要なことです。バトルでもトークでも話をしながら本を提供していつてもらいたい。

第13分科会 テーマ「読み聞かせ活動と読書支援」～読書の楽しさを手渡したくて～

おはなしはらっぱ たんぽぽ

司会者 鈴木仁美(小諸市立東小学校 読み聞かせボランティア「おはなしはらっぱ たんぽぽ」)

発表者 古川真美(小諸市立東小学校 読み聞かせボランティア「おはなしはらっぱ たんぽぽ」)

掛川一美(小諸市立水明小学校 読み聞かせボランティア「やかまし村」)

1. 発表の概要

(1) おはなしはらっぱ たんぽぽの活動概要

- ・現在活動メンバー21名、月1回の朝読書、1学期に1回 授業時間1時間をもってお話し会の実施、月1回定例会実施
- ・読書旬間にはブラックパネルシアターを含めたお話し会を実施
- ・6年間で読んだ本を振り返る内容の卒業お祝いお話し会の実施
- ・新規メンバーの不足、定例会やお話し会の日程調整等に苦勞する
- ・司書教諭、学校司書と年間計画、月々の予定等適宜連絡を行っている



(2) やかまし村の活動概要

- ・現在活動メンバー14名、各クラスに月1回の朝読書、1.2年生に年1回お話し会実施
- ・PTA 親子読書で購入する本の選定相談
- ・卒業お話し会の実施(子ども達のエピソードを入れた劇、手形とメッセージを保護者と先生にプレゼント)
- ・新規メンバー不足、通常活動のメンバー確保が難しい
- ・司書教諭、学校司書と年間計画、読み聞かせ打ち合わせなどの連携をしている

2. グループワーク

参加者を6グループに分け、各自持参した絵本を紹介し合った後に、それらの絵本を使って共通のテーマを考え、組み合わせなお話し会のメニューを作成してみる。

①テーマ「あったかいけど切ない人生の話」

1. 『まゆとおに』
2. 『おまえ うまそうだな』
3. 『あおくんときいろちゃん』
4. 『泣いた赤おに』
5. 『ずっとそばに』
6. 『ねえどれがいい?』

②テーマ「変わっちゃった!」

1. 『りんごかもしれない』
2. 『あおくんときいろちゃん』
3. 『きつねのホイティ』
4. 『3びきのかわいいオオカミ』
5. 『山のとしょかん』
6. 『ウェズレーの国』

③テーマ「おもう」

1. 『だれのかお?』
2. 『どこいったん』
3. 『あしなが』
4. 『ちびゴリラのちびちび』
5. 『ひみつのカレーライス』

④テーマ「ドキドキしながら大きくなろう!」

1. 『はじめてのおつかい』
2. 『やまこえのこえかわこえて』
3. 『くんちゃんのはじめてのがっこう』
4. 『「あ・そ・ぼ」やで!』
5. 『おおきくなりすぎたくま』
6. 『ともだちや』

⑤テーマ「見方を変えれば」

1. 『はんなちゃんがめをさましたら』
2. 『雲のてんらんかい』
3. 『サムとデイブ あなをほる』
4. 『へいわってすてきだね』 『おなべおなべにえたかな』 『りゆうがあります』の紹介

⑥テーマ「小さなきずな大きなきずな」

1. 『ふたり』
2. 『まるごとたべたい』
3. 『パンのかけらとちいさいあくま』
4. 『あしたもともだち』
5. 『まゆとうりんこ』
6. 『もうすぐおしょうがつ』



3. まとめ

朝読書で読み聞かせを行っているボランティアの方等には、テーマを決めて本を組み合わせる事が新鮮だったようである。限られた時間の中で、子ども達に本の楽しさを伝える為には、工夫して手渡すことが大切であると改めて感じた。